

第 115 回日本小児科学会学術集会

日時：2012年4月20日（金）

会場：福岡国際会議場（福岡）

演題：「言語の質的側面からの自閉症児と定型発達児の識別」

発表：中井 靖

【質問】（未確認）先生（愛知県心身障害者コロニー）

「変動係数について生活年齢との関係を見ているが、言語性知能指数（VIQ）との関係を見るべきではないだろうか」

回答：今回の研究では、VIQ との関係は検討していない。代わりとして、自閉症スクリーニング質問紙（ASQ）との関係を検討し、以前の学会にて報告している。ASQ すなわち自閉症の特徴に該当する項目数と、変動係数には相関がなかった。このことから、自閉症の単調なイントネーションは、自閉症の程度に関係なく一貫して認められ、自閉症の中核症状である可能性が考えられた。

【質問】星野恭子先生（南和歌山医療センター）

「慣れていない訛り言葉や標準語に変換して話すとき、単調になりやすい。そのようなこととの関連はどうか」

回答：自閉症と臨床で関わっていると、訛りを超えて「何か変」と感じる。これを確認するため、今後、関西弁や標準語等の地域に分けて、検討していきたい。

【質問】作田亮一先生（座長・獨協医科大学越谷病院）

「今回は単調なイントネーションの表出についてだが、入力や認知との関係はどうか」

回答：定型発達の赤ちゃんの「オギャー」という泣き声について、フランス人とドイツ人で既に違いがあると報告された。すなわち、母国語による入力の違いが、胎児期で既に出力に違いがある。自閉症は認知に問題があり、これは入力の問題である。そのため、独特な出力になることが十分考えられる。今後は、入力も含めて総合的に検討していきたい。

【助言】鈴木郁子先生（光の家療育センター）

「自閉症は運動の不器用さがある。単調なイントネーションは、口の動きの不器用さや聴覚フィードバックによる微調整の困難さが関連しているかもしれない」

【感想】

この研究を始めて約4年が経ちました。わずかな臨床経験から「これだ！」と閃いたものの、方向性も手段も漠然としたものでした。神戸大学・高田哲先生の「モヤモヤとした研究の方が長くやっていける」という言葉を支えに研究を続けています。

今回の発表を通じて、フロアの先生方からご助言とともに「この研究、おもしろそう」といった言葉をいただき、大変励みになりました。また、これまでに発表を積み重ねた成果か、少し気持ちの余裕ができ、発表を楽しむことができました。この研究とともに成長している自分に気づくことができ、今後も精進していきたいと、気持ちを入れ直す機会となりました。

以上